空間論理と視覚意味（上）

――宋遼金墓「婦人啓門」図新論――

李　清　泉

西林孝浩　訳

はじめに
一　宋遼金墓「婦人啓門」図の背後にある墓葬空間の論理
二　「婦人啓門」図は、どのようにして「寝」記号を暗示するようになったのか（以下、次号）
三　宋遼金墓「婦人啓門」図は、ただ、「寝」の象徴記号にすぎないのか
結語

はじめに

かつて半世紀以上も前に、王世襄 Wang Shixiang 氏は、「四川南渓李庄宋墓」の文中において、「門蔽（門扉）から半身をのぞかせる婦人は、全ての墓のなかで最も注意をひき（中略）その形制は宜賓旧州壩宋墓と、頗る似るところが多く、当時の極めて一般的な装飾と看做すことができる」[1]と述べられた。この時から半世紀以上が経過した現在では、数多くの考古学における新発見が得られ、宋金墓における婦人啓門[補註1]の装飾モティーフの流行は、すでに、学界の多くの関心を惹起している。[2]さらに、このモティーフに焦点を充てた研究によって、宋金時期墓葬芸術における重要な意義が、いよいよもって見えてくるようにもなった。しかし今に至るまで、宋金墓装飾における、その具体的内容は曖昧なままであり、半身を見せて、出ようか入ろうかとしている啓門の女性の姿は、依然として、多くの謎を残している。

加えて、婦人啓門図像と同時に存在し、かつ密接に関係しながら、我々を難解にさせているもう一つの現象は、墓葬内部に一般的に出現し、何ら実際の用途に堪えない、木造建築を模して塼に彫りだした門楼や、模造された仮門が見受けられる点である。この種の仮門は、通常、墓室の後壁に位置し、多くは独立した装飾だが、時には、婦人啓門形象と一体をなすこともある。

筆者は、以下のように考えている。すなわち、かかる「婦人啓門」図像は、一種の造形語彙であって、そのために宋遼金墓葬装飾において広範に流行し得たのであり、どの時期や、どの地域であっても、終始、一律の風格と形式をみな保持し続けたわけだが、それは、あたかも一つの固定した不変的形象コードのようであり、その背後には、必ずひとまとまりの、当時の誰にも一般的に認知され得る、記号象徴の論理が示されている。しかも、この記号論

理それ自体は、当時の墓室内部において、木造建築を模して塼彫した門楼や模造された仮門装飾といった一系列がなぜ流行したのかという、我々がこれまで解けなかった空間問題の鍵ともなり得るものである。

従来、宋遼金「婦人啓門」モティーフの研究には、「空間」論に立った、正しい視点のものが、少なからずあった。しかし、文化史と思想史の巨視的な観点から、図像それ自体の具体的特徴と語義連関について、詳細に考察したものは大変少ないため、当該図像の墓葬空間における象徴記号としての根幹の論理、そしてその背後にある本来の意味について、最終的な説明がまだできていないのである。

本論文は、この表現モティーフの図像言語としての適切な分析と理解を通じ、宋遼金時期墓葬装飾において、これまで、人々を困惑させてきた空間の論理を探求しようと企図している。あわせて、「時代のまなざし」を援用することで、視覚文化とイデオロギーの側面から、その図式の社会史的原因について、および、その図像の語義が、当時の喪葬芸術において、どう延伸したかについても論じることとしたい。

一　宋遼金墓「婦人啓門」図の背後にある墓葬空間の論理

筆者の観察によれば、宋遼金墓葬装飾で、これまで漠然と「婦人啓門」と呼称されてきた図像は、婦人進門・婦人閉門[補註2]・婦人啓門の、三種類に分類することが可能である。そのうち、第一類と第二類の図像は多くはないが、宣化Xuanhua一号・二号・五号・六号・七号遼墓壁画では以下のように確認される。すなわち、東壁の仮門では、どの人物も皆、扉を開けて墓室の中へと進入し（挿図1）、これらの図像の傍らには、手に唾盂（唾壺）・銅鏡・巾帛をもつ男女の侍者が描かれることが多い。そして西壁の仮門には、婦人が墓室に対して背を向け、扉が閉じた状態で描かれることが多く、また門には、往々にして鉄の錠前があらわされる。これらの図像には、その西南壁に、燃灯する侍女を描いた画面を隣接させるのが基本となる（挿図2）。婦人進門と婦人閉門の図像付近に、朝起きて身支度をする場面と、日が暮れて燃灯する場面とが描き分けられることから、これらの二図像は、朝になって門が開かれる場面と、日が暮れて門が閉じられる場面とを描き分けていると考えられるのである。これを踏まえるなら、これら二図像が含む意味は、日々の時間の経過に沿った活動と関わりがあり、日常の住居における、召使いたちの奉侍活動が重要な構成要素であると言える。[3] 以上、述べてきた二図像は、あ

挿図1　河北省宣化二号遼墓 東南壁壁画 備経図（婦人進門）

るいは「准婦人啓門図像」と呼称できるかもしれない。しかし本論文で集中的に検討することになるのは、上述した二種の准啓門図像ではなく、通常、墓室後壁に出現する、仮門の扉の背後に身体を半分隠す婦人啓門図像である。

二種の准啓門図像とは異なる、第三類の婦人啓門図像が、宋遼金の墓葬の中で最も多くあらわされる。なおかつ、空間コンテクストにおいて、墓室の他の壁面の壁画内容と明確な関連がないというものが、最も典型的な「婦人啓門」図である。それは通常、絵画あるいは著色浮彫の形式で墓室の後壁に表され、かつ婦人の形象は総じて片手を門扉に添え、仮門の背後に身体を半分隠し、門の外を伺っている。以下に、作例をあげよう。

挿図2　河北省宣化七号遼墓 墓室西壁壁画 婦人閉門

河南Henan禹県Yuxian白沙Baisha宋墓一号墓の後室奥壁にある仮門は、塼彫によってその向こう側を表しており、頭部から双髻を垂らし、袖の窄まった衫を着て長裙をはいた一人の少女が、その左手を門扉に添え開扉する状態である（挿図3）。二号墓もまた後壁の塼を積み重ねた仮門には、わずかに開いた左の扉の右端に、鬟（輪形のまげ）を結い、青衫を身につけた若い一人の女性が描かれ、それはあたかも、右の扉の向こうから、身を乗り出して門の外を伺っているかのようである[4]（挿図4）。洛陽Luoyang耐火材料工場十三号北宋晩期墓では、墓室北壁の塼彫によって、やはり、類似した婦人啓門の形象が表されている[5]。

四川Sichuan宜賓Yibin旧州壩Jiuzhouba白塔Baita宋墓は、墓室の後壁に龕を設け、龕内に槅扇（菱格子桟唐戸）の仮門を彫刻し、一人の婦人が手に捧げ物をもって、扉で半身を隠し、半身をこちらに見せている[6]。南渓Nanxi李庄Lizhuang宋墓では、墓室の後方の龕に、やはり一人の女性を彫刻し、上は右前に着付け、下は百褶裙（襞のある裙）をはいた姿で、左手を門扉に添え、扉の内部からおそるおそる外を伺う[7]。華鎣Huaying安丙An Bing墓一号墓の後室後壁に木造を模して構成された建築は、中心内部に三重の後龕を設け、そのうち内側にある龕の上部に帷幔が掛けられ、帷幔の下に屏風を配し、屏風の中央に啓門する女性があらわされる[8]。瀘県Luxian青龍鎮Qingkongzhen三号宋墓の後壁龕内に彫刻される、左扉をわずかに開いた仮門には、門扉の前に、双髻を束ね、微笑をたたえ、左手は扉に手を添え、半身を門扉の外へのりだす一人の女性を浮彫している[9]。

貴州Guizhou遵義Zunyi桐梓県Tongzixian營盤山Yingpanshanの麓の宋墓、高坪郷Gaopingxiang宋墓および、皇墳嘴Huangfenzui宋墓なども、やはり後壁に、類似した様子で啓門する女性を彫刻している[10]（挿図5、6）。

挿図３－(1)　河南省禹県白沙一号宋墓 塼彫壁画 婦人啓門

挿図４　河南省禹県白沙二号宋墓 塼彫壁画 婦人啓門

挿図３－(2)　同 部分

挿図５　貴州省遵義専区桐梓県營盤山麓宋墓 墓室後壁彫刻

挿図６　貴州省遵義皇墳嘴宋墓 左室壁上彫刻

河北宣化四号遼墓では、後室の北壁に、朱色の仮門を描き、扉の中央に女性が身を乗り出して外を伺う様子が描かれる。[11]

山西 Shanxi 稷山 Jishan 馬村 Macun 一号金墓では、墓室北壁に塼彫で門楼を表し、門楼の後壁には朱色の板門を表す。その左の門扉をわずかに開け、顔におしろいを塗った黒髪の若い女性を一人表す。その頭部は大きな髻を垂下させ、上着は短衫、下は長裙をはき、ぴったり門扉によりかかって立ち、表情は失望した様子で門の外を向いている[12]（挿図7）。新絳 Xinjiang 万安 Wan'an 杜庄 Duzhuang 金墓では、墓室北壁の二重須弥座の上の中央部分に塼を積み上げて仮門を表し、門の右扉をわずかに開いた状態で、扉の間から、一人の美しく、しとやかな姿の長衫の女性が、門の内側からおそるおそる外を見ている様子を彫りだしている[13]（挿図8）。

山東 Shandong 済南市 Jinanshi 司里街 Sulijie で発見された元代塼彫壁画墓の一基では、墓室の北壁（後壁）の二重の木造楼閣を模して塼彫であらわし、下方にはまた朱で著色された仮門を配し、仮門の中央には、一人の婦人が半身をわずかにのりだすように大略描かれている[14]（挿図9）。

イギリスの著名な美術史家であるマイケル・バクサンドール Michael Baxandall は、かつて、このように述べている。「身振りの語彙は、その当時の状況との関係においてその意義を獲得する[補註3]」。またこうも述べる。「歴史事象は、当時の様々な状況を踏まえて問題を解決しようとすることで、そして、問題とする用語・文化・記述の間の、ある一つの理にかなった連関を再現することによって、解釈へと到りうるであろう[15]」。上記のような問題理解、そして問題解釈の方法と論理に照らすと、我々は、まず次のような問いをたてることが必須となる。宋金時期に、墓葬装飾において頻繁に出現する婦人啓門図像の、いったい何が解決されるべきなのか?。さらに問題の所在を求めるならば、我々は、まず、この種の図像に対して、当時本来の墓葬状況やコンテクストに基づきながら、観察し、その相互関連を分析することが、より必要であることは明らかである。

事実、宿白 Su Bai 氏は、かつて早期の著作『白沙宋墓』において、この種の婦人啓門の装飾を論じられ、「その位置を観察するならば、仮門のその向こうに、更に中庭や家屋、大広間が存在するかのように示していると解するのは疑わしく、また、墓室において、まだそこが到達地点ではないことを示している[16]」と指摘されている。巫鴻 Wu Hong 氏は、漢代石棺画像における闕門と啓門の図像に言及された際、この種の図像が、みな外部の別の時空との接続を象徴し、死者が別世界へ進入するための入り口と認められた[17]。これらの認識は、みな図像表現の解釈において、空間が暗示しているものを、正確なレベルへ引き上げようとしている。劉耀輝 liu Yaohui 氏が近年指摘しているように、婦人啓門モティーフにおける「門」はまさしく問題の鍵なのである[18]。

宋遼金時期の墓葬を通観すれば、墓室の後壁に塼彫の仮門を模造する現象は、十分に一般的である。まだ不完全な統計ではあるが、現在、発掘された宋代墓葬では、後壁に仮門装飾を設置する例は六十余基を下らず、そのうち、仮門の扉の間に啓門婦人の図像内容を出現させる例が、三分の二を占める[19]。金代墓葬では、晋南 Jinnan 地区で発見された例だけでも、三十余基の墓で、墓室の後壁に仮門が設置され、そのうち、啓門婦人図像を塼彫や著色絵画で表すものが半数以上を占める[20]。遼代墓葬表現において婦人啓門モティーフは、これらほど多くはないが、その後期の漢人および契丹人の墓葬においては、その墓室後壁に著色で仮門を描くか、もしくは塼彫で門楼を模造する現象は、十分に一般的である。

挿図７－(2)　同 部分

挿図７－(1)　山西省稷山馬村一号金墓 墓室北壁塼彫

挿図９　山東省済南市司里街元墓 墓室北壁

挿図８　山西省新絳万安杜金墓 墓室北壁

挿図 11　河北省宣化一〇号遼墓 後室 門楼

挿図 10　河南省禹県白沙一号宋墓 後室北壁 仮門

この種の仮門における特殊かつ重要な表現は以下のようになる。それらはみな墓室の入り口と相対するように配され、墓室壁面全体における視覚の中心に位置する。しかもそれは通常、著色絵画や塼彫の形式によって、地の表現からより強調されている。墓葬におけるこのような仮門の多くが、さらに塼彫によって門楼形式を模造しようとする工夫が凝らされたり、門扉も、その大半が朱により鮮やかに著色されることで、明らかに、墓葬装飾全体において、常に際立つよう誘導されている（挿図10）。宣化一〇号遼墓では、後室の門楼左右に朱柱を墓塼上に立て、朱柱の上に闌額（補註4）（頭貫）をつくり三つ叉の斗栱を支えている。中間は補間鋪作とし、両端は柱頭鋪作を採用し、みな斗口跳とする。櫨斗（大斗）の上方に華栱（肘木）をわたし、左右は泥道栱とする。柱頭枋（桁）は朱地に、五組の流雲を描き、十四の檐椽（地垂木）を配する。檐板の上に九条の黒色の瓦壟を受ける。瓦壟は仰向けにして重ね葺かれ、再びその上方に人字披の屋脊をなし、屋脊の外側と内側は二重に黒の塼彫を配し、中間の三角には朱地に黒釘を配し、博風板と朱色垂魚を表す。屋脊正中には円形の脊頭（棟木の先端）を表す。門楼の下方には、両扉の仮門を表し、子桯・立頰・門額（内法貫）がある。門は朱色の彩色絵画で表され、各扉の表面には九個の黒い門釘が表される。門楼の両側には藤細工の花盆台各一を配し、それぞれの花盆台の上には花甕を置き、その中にはどちらも牡丹の花が生けられる（補註5）（挿図11）。多くの金代墓葬において、この種の門楼は、より壮大で立派となり、比べものにならないほど精緻に造られるようになる（挿図12）。

加えて、このような仮門をもつ例のほとんどが、門扉の一方をわずかに開こうとする形式であり、それは、門の向こうにある空間の客観的実在性を暗示、もしくは強調しているかのようである。これらの形跡は、一つの共通す

挿図12　山西省稷山馬村八号金墓 墓室北壁 塼彫門楼

るメッセージを伝えようとしている。すなわち、後室の向こうには、論理上は、さらにもう一つの重要な空間が存在するはずである。ただし、このような空間は決して実際の存在ではないのである。

漢代以来、墓葬は実際の建築の形跡を模倣してきたことがいよいよ明らかにされ、多室墓、なかでもとりわけ双室墓の「前堂後寝」建築空間の構造は、古の人々が墓を造る際に、ある普遍的規律に、ただひたすら従っていたかのようである。宋遼金墓葬では、実際の建築の形跡が、より顕著である。墓門の多くは、塼彫や著色絵画の形式であり、門楼を木造建築に倣って模造する。墓葬の多くは前後の二室を有し、四壁の表面上に梁柱や斗栱を造りだし、多くの壁画内容と副葬の器物は、みな住居生活と関わりがある。なおかつ棺床は、通常、後室に設けられ、「前堂後寝」空間構造にまさに合致するかのようである。しかし、後室壁画の内容を仔細に観察してみると、我々は、それら図像形式によって出現させられた各種の住居生活を奉侍する日常生活場面を目にすることとなり、それは同時に、我々をして、上述した墓葬内の建築空間の理解に賛同できなくさせてしまうのである。

例えば、次の例を見よう。河南登封 Dengfeng 黒山溝 Heishangou 宋墓（一〇九七年）では、墓室内に壁同士の間に柱を各一ずつ配置して八柱とし、北壁は塼を積み上げて仮門を築き、残りの壁面には宴図・伎楽図・育児図・墓主夫婦の芳宴図・侍寝図・侍洗図等の各場面を描き分けている[21]（挿図13）。河南禹県趙大翁 Zhaodaweng 墓（一〇九九年）では、後室北壁に仮門および婦人啓門の彫像を設置し、東北と西北の二壁に欞窓（連子窓）を作り、そして西南壁と東南壁には梳粧（化粧図）と住居で奉侍する場面が描かれる[22]（挿図14）。宣化遼墓では、後室の後壁に塼彫で門楼を模造し、残りの各壁面に、備経・奉茶・宴の準備・燃燈・化粧の場面を配するタイプが一般的である。金代墓葬では、各種の住居で奉侍する内容を描くことを除けば、多くの著色塼彫墓葬において、後壁に門楼を模造し、対面に戯楼と雑劇が演じられる場面を配置するのが一般的である。我々の考察を非常に難しくしているのは、通常であるならば理解が可能であるところの、かかる壁画に表されたこうした活動が、「寝」空間における発生と進行であるという点である。

極めて明らかなことだが、墓葬におけるこの種の装飾的表現と、機能を出発点とする墓葬建築空間との間で、両者の論理に相当の違いがある。この一点において、ジェシカ・ローソン Jessica Rawson 教授が指摘されたのは、「ただ機能のみに訴えるだけでは、表現の持続と発展を説明できない。なぜならば、まさしく我々が目にするように、中唐時代と宋代において、当該の墳墓に対し、わずかに身を置くことが出来るような範囲という制限がかけられてさえも、絵画表現は、なお依然として衰えることなく用いられるのである。これによって、我々は、この種の表現の作用について、異なった角度から観察することが必要とされる。（中略）人の宮殿や土地ないしは宇宙空間への奢侈な要求を満足させるためには、表現の方式が、なんらかの求められる内容と空間に代替される。これは必然的なのかもしれない[23]」。ローソン教授の

挿図 13　河南省登封黒山溝宋代李守貴墓 展開図

挿図 14 –(2)　同 後室東南壁壁画 奉持図

挿図 14 –(1)　河南省禹県白沙宋墓 後室西南壁壁画 梳粧（化粧図）

この一つの観点は、宋遼金墓葬に見られる複雑な空間論理の解釈に対し、極めて有効である。

視覚表現の角度から観察してみると、宋遼金時期は、各種の住居奉侍活動の図像が内包されている墓室内部であることから、それは見たところ、死者の霊魂のために供せられる、平素の活動の場としての「堂」を彷彿させる。そして、墓室後壁の仮門が象徴し暗示しているのは、あちらにある虚構の空間であって、論理上は、ただ、死者の霊魂が安眠するところでなければならない。この点に関しては、我々も以下に例証する観察で、格別の明晰さが得られることで承諾されよう。

二〇〇〇年夏、筆者は鄭岩氏とともに宣化遼墓の実地調査に赴いた際、すでに発見されていた一〇号墓において、それまで報告されていなかった一つの壁画痕跡――当該墓の後室門楼の正面前方約五十cmの場所――を確認した。積み上げが五十cm足らずの棺床が一つあり、棺床の北側に、更にまた非常に小型の仮門を一つ描き、その門の二枚扉は、内側に向けて開いた状態で表されていた（挿図15）。このような小型の仮門は、引人入勝（人を佳境に引き入れる所）なのであり、我々は、棺床上の死者が、墓葬中に可能な活動について、画工がどのように想像したかというその推論の拠り所となりうるものである。興味深いのは、この棺床背後に隠された小型の仮門と門楼下方の門扉とが、ちょうど相対していることで、まさに墓葬の設計者が、死者霊魂のため、専用に設置した、寝室と繋がる通路であるにちがいない。しかも、棺床上のこの唯一の仮門を根拠として、我々はまた、墓を造った者が、墓主人の陽宅での基本的生活状態――墓室の主人は、日中は、彼が生前、家の大広間で坐し、侍者たちの各種の奉侍を受けていたのと同じように、彼は棺床の上に坐す。夜になると彼は自分の寝室へと戻り、そこで安眠休息する

挿図15－(1)　河北省宣化一〇号遼墓 後室北壁 著色絵画門楼

挿図15－(2)　同 棺床 前面ならびに背面図示

挿図 16　内蒙古自治区敖漢旗下湾子遼墓 北壁壁画

挿図 17　福建省尤溪一中宋墓 墓室西壁（後壁）壁画（線描）

――を構想できたということも、極めて容易に理解できるのである。

さらに興味深いのは、通常、墓室後壁の仮門が暗示あるいは隠喩するところの「寝」によって、視覚表現上、偶然にも、その内部のかすかな手がかりが露出してきたことである。内蒙古 Neimenggu 敖漢旗 Aohanqi 下湾子 Xiawanzi で発見された一基の遼代墓葬は、墓室北壁の門扉左右にそれぞれ屏風を描いている。[補註6] 門扉の中央には啓門する女性をあらわしており、屏風の向こうに、私的な空間である寝室の存在することが明白である[24]（挿図16）。河南登封箭溝 Jiangou 宋墓では、墓室北壁に著色絵画で仮門をあらわし、門扉の間では、上方に帷帳を掛けた床榻（寝台）を配し、さらに床榻の上には、衾被が敷かれる[25]。福建 Fujian 尤溪 Youxi 一中 Yizhong の一基の宋墓は、墓室西壁（後壁）に直接、房門を開け放った寝室を一つ描いており、寝室中央に床を配し、床上に衾被など寝具があり、床の上方にはやはり帷帳が掛けられている[26]（挿図17）。山西平定県 Pingdingxian 城関鎮 Cheng guanzhen 西関村 Xiguancun の一基の金墓の、墓室後壁にもやはり絵画表現があり、それは尤溪一中宋墓における床帳の内容と完全に一致する[27]。また、遼寧 Liaoning 凌源 Lingyuan 富家屯 Fujiatun の一基の元代壁画墓は、さらに墓室後壁の壁面全体に、床榻と帷帳を描いている[28]。同様にして、目を見張る作例としては、稷山馬村の一基の金墓は、墓室後壁の門楼下方の仮門は、完全に開放しきっており、しかも仮門内部には、屏風に加えて、その対面側に表された舞楼の雑劇を観覧できるよう、年老いた墓主夫婦がうまい具合に坐しているのである[29]（挿図18）。このような形跡が逐一、明確に表明しているのは、仮門図像の背後に内蔵されたその私的な空間が、まさに墓主夫婦のため専用に設けられた「寝」であるということだ。

本論文で検討する婦人啓門図像に話を戻そう。婦人啓門は、墓葬芸術にお

挿図18　山西省稷山馬村M４金墓 北壁（後壁）塼彫

ける一つの伝統モティーフなのであり、本来は空間表現の一種の記号である。宋遼金時期の墓葬において、創造の産物たるこの一つの形象記号は、墓室の後壁に機械的に適用され、墓葬の中に大量に出現する模造された塼彫門楼もしくは著色絵画による門楼と一緒に結びつき、それまでの墓葬装飾とは異なった新しい視覚空間の論理のまとまりを構成したのである。このようなひとまとまりの新しい視覚空間論理に基づいて、墓葬の後室は装飾され、死者に対しては、日常生活が供され、また各種の奉侍と享楽的「堂」が与えられることとなった。そして「堂」と対応する「寝」は、墓室後壁仮門における婦人啓門図像の、その周囲をさらに拡張発展させ、著色塼彫門楼などの装飾が加えられ、暗示性の表現伝達は、図像が造りあげた見せかけの視覚を通じてなされることとなったのである。この宋遼金時期の墓を造った者とその画工は、視覚表現手段の助けを借りて、墓葬建築という有限の空間を、一度では終わらない変革と発明へと延伸させたと言うことができよう。しかも、婦人啓門というこの伝統モティーフは、ちょうどこの変革と発明の最も穏当な、芸術化の鍵となる最適な記号要素を実現させたのである。

註

（1）王世襄「四川南渓李庄宋墓」『中国営造学社滙刊』第七巻第一期、一九四四年、一二九～一三九頁。

（2）宋遼金墓の装飾に見られる「婦人啓門」モティーフの研究は以下を参照のこと。宿白『白沙宋墓』（文物出版社、二〇〇二年）五四～五五頁、註75、梁白泉「墓飾「婦人啓門」含義揣測」『中国文物報』一九九二年一一月八日、劉毅「「婦人啓門」墓飾含義管見」『中国文物報』一九九三年五月一六日、鄭岩「民間芸術二題」『民俗研究』一九九五年第二期、八九～九五および七七頁、鄭灤明「宣化遼墓「婦人啓門」壁画小考」『文物春秋』一九九五年第二期、七三～七四頁、鄭紹宗「宣化遼墓壁画」『故宮文物月刊』一九九七年第一二期、三三～三四頁、劉耀輝『晋南地区宋金墓葬研究』（北京大学修士学位論文、二〇〇二年）三三～三四頁、鄭小南「従考古発掘資料看唐宋時期女性在門戸内外活動」『歴史・史学与性別』江蘇人民出版社、二〇〇二年、一一三～一二七頁、韓小囡『宋代墓葬装飾研究』（山東大学博士学位論文、二〇〇六年）一一三～一一九頁、張鵬「婦人啓門図試探―以宣化遼墓壁画為中心」『芸術考古』二〇〇六年第三期、一〇二～一〇八および六四頁、鄧菲「別有洞天―従瓷枕看宋元時期的人物啓門図像」（鄧菲博士より刊行前の新作論文を賜った。謹んで謝意を表したい）等。

（3）以下を参照。李清泉「宣化遼墓壁画中的時間与啓門図像」韓国中国史学会編『中国史研究』第三四輯、二〇〇五年、七七～一〇六頁。この論文の英訳は以下の通り。Fei Deng (trans.), “Some Aspects of Time and Space as Seen in the Liao-dynasty Tombs in Xuanhua”, *Art In Translation* 2-1 (March 2010), pp.29-54 (26).

（4）註2前掲、宿白『白沙宋墓』七五頁、図版四三。

（5）洛陽博物館「洛陽澗西三座宋代仿木构磚室墓」『文物』一九八三年第八期、一三～二四頁。

（6）莫宗江「宜賓旧州壩白塔宋墓」『中国営造学社滙刊』第七巻第一期、一九四四年、一〇五～一一〇頁。

（7）註1前掲、王世襄「四川南渓李庄宋墓」。

（8）四川省文物考古研究院・広安市文物管理所・華鎣市文物管理所編著『華鎣安丙墓』（文物出版社、二〇〇八年）二六頁、図二三。
（9）四川省文物考古研究所『瀘県宋墓』（文物出版社、二〇〇四年）四四～四五頁、図三七、彩色図版一二―2。
（10）貴州省博物館籌備処「貴州遵義専区両座宋墓簡介」『文物参考資料』一九五五年第九期、七九～八六頁。
（11）河北省文物研究所『宣化遼墓（下）』（文物出版社、二〇〇一年）彩色図版九五。
（12）山西省考古研究所『平陽金墓磚彫』（山西人民出版社、一九九九年）五二、一三九頁。
（13）註12前掲、『平陽金墓磚彫』七八～七九頁。
（14）済南市考古研究所「済南市司里街元代磚彫壁画墓」『文物』二〇〇四年第三期、六一～六八頁。
（15）Michael Baxandall, *Patterns of Intention:On the Historical Explanation of Pictures*, Yale University Press,1985, p.35.
（16）宿白『白沙宋墓』五四～五五頁、註七五。
（17）巫鴻「四川石棺画像的象征結构」（巫鴻著、鄭岩・王睿編『礼儀中的美術―巫鴻中国古代美術史文編』生活・読書・新知三聯書店、二〇〇五年）一七一～一七六頁。
（18）註前掲、劉耀輝『晋南地区宋金墓葬研究』三三～三四頁。
（19）註2前掲、韓小囡『宋代墓葬装飾研究』五七～五九頁。
（20）註2前掲、劉耀輝『晋南地区宋金墓葬研究』。
（21）鄭州市文物考古研究所・登封市文物局「河南登封黒山溝」『文物』二〇〇一年第一〇期、六〇～六六頁。
（22）宿白『白沙宋墓』四二～四三頁、図版六、三二。
（23）Jessica Rawson, “Changes in the Representation of Life and the Afterlife as Illustrated by the Contents of Tombs of the T’ang and Sung Periods”, Maxwell K. Hearn and Judith G. Smith (eds.), *Art of Sung and Yuan*, Department of Asian Art, Metropolitan Museum of Art, New York, 1996, p. 28.
（24）敖漢旗博物館「敖漢旗下湾子遼墓清理簡報」『内蒙古文物考古』一九九九年第一期、六七～八四頁。
（25）鄭州市文物考古研究所『鄭州宋金壁画墓』（科学出版社、二〇〇五年）第一四九頁。ただし当該の報告書では、床榻上の衾被を、誤って、蓋部が蓮の形を呈した盒（箱）を長卓の上に安置したものと看做している。画面を詳細に観察すれば、「蓋部が蓮の葉の形を呈した」「盒（箱）」は誤解であり、実際は、宋金元の墓葬壁画に通常に見られる任意に折りこまれた衾被でしかありえない。報告が「案（長卓）」と称するものは、高さが十分ではなく、なおかつ傍らに描かれた壺門は、その上方の帷帳と関連しているように見受けられ、寝内の床榻を描き出していることは明らかである。遼寧凌源富家屯元墓墓室北壁に描かれた床榻と衾被（遼寧省博物館・凌源県文化館「凌源富家屯元墓」『文物』一九八五年第六期、五五～六四、七四頁を参照）のような例は、箭溝宋墓北壁の絵画表現と完全に一致する。
（26）福建省博物館等「福建尤渓発現宋代壁画墓」『考古』一九九一年第四期、三四六～三五一頁。
（27）山西省考古研究所・陽泉市文物管理委員会・平定文物管理所「山西平定宋・金壁画墓簡報」『文物』一九九六年第五期、四～一六頁。
（28）後壁壁面全体を占め、一幅の帷帳をつけ、床榻と侍女をその画面の主要な表現としている。画面上方には、高く帷帳が掛けられ、帷帳の下方には、中央に紅被と緑枕をのせた床榻を配する。この図はかつて「探病図」と誤解されていたが、実際は、侍女が寝内空間において、二列に待機している様子を描いている。註25前掲、遼寧省博物館・凌源県文化館「凌源富家屯元墓」参照。
（29）註12前掲、山西考古研究所『平陽金墓磚彫』五五頁、一三二頁、図五、図八五。

（Li, Qingquan 広州美術学院芸術与人文学院教授）

訳者補註

（補註1）本文註2にあげられた文献からも明らかなように、「婦人啓門」は、中国において用語として定着している。また、近年出版された徐光冀総監修『中国出土壁画全集』全一〇巻の日本語訳（古田真一監修・翻訳、科学出版社・国書刊行会、二〇一二年）でも、「婦人啓門」の呼称が用いられている。こうした状況に鑑み、この翻訳文でも、そのまま使用することとした。
（補註2）閉門する図像については「婦人関門」「婦人掩門」「鎖門図」など、様々な呼称があるが、原文では「婦人関門」が用いられており、ここでは「婦人閉門」と訳した。
（補註3）このバクサンドール氏の引用文は、直後に引用される文献（本文の註15）の当該頁には確認できないが、類似した言説は、以下の文献に確認できるので、参考としてあげておく。Michael Baxandall, *Painting and Experience in Fifteenth-Century Italy*, Second Edition, London, 1988, pp. 56-71（和訳：マイケル・バクサンドール『ルネサンス絵画の社会史』篠塚二三男・池上公平・石原宏・豊泉尚美訳、平凡社、一九八九年、一〇三～一二六頁）。

（補註4）無用の混乱を避けるため、建築用語は、原則、中国で使用される用語で表記し、幾つかの用語については、日本における建築用語をカッコ内に記した。用語の対応に際しては、主に、田中淡「五代・北宋・遼の建築」および同「建築設計マニュアルの金字塔『営造法式』」『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏』（小学館、一九九八年、二八五～三〇〇、三三五～三四〇頁）そのうち、とくに挿図二八四に付される建築用語対応表を参照した。

（補註5）本文挿図15にも拡大図版が掲載されるが、彩色図版については、河北省文物研究所『宣化遼墓（下）』（文物出版社、二〇〇一年）彩色図版一五、河北省文物研究所『宣化遼墓壁画』（文物出版社、二〇〇一年）図一九、補註1前掲『中国出土壁画全集』第一巻の図一四三などを参照。

（補註6）本文註24の報告論文によれば、挿図16は、一号墓のものであり、その墓室は八角形である。挿図16は本文に言及される通り北壁であるが、屏風が描かれているのは、より厳密に言えば、北壁に接している東北壁と西北壁になる。

（訳者　にしばやし たかひろ　立命館大学准教授）

※原著　李清泉「空間邏輯視覚意味―宋遼金墓〝婦人啓門〟図新論」『古代墓葬美術研究』第一輯、文物出版社、二〇一一年九月、三二九～三六二頁。
なお、翻訳に当たっては、氏から提供いただいた同一の題名と内容で『美術学報』（二〇一二年二月、五頁～二五頁）に公表された論文とも改めて照合し翻訳に反映させた。

（本翻訳論文は平成二十四年度海外編集委員による推薦論文である）